

2015. 11. 25

No.192

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



## 戦争させない国を望みます



11.2 十勝岳連峰とぶどう畑

安保関連法が強行採決されて、2ヵ月が過ぎました。季節は初冬に変わり、寒さも厳しくなりましたが、みなさまはいかがお過ごしでしょうか？

デモに参加する人は少し減りましたが、毎週のように札幌大通で「9条守れ」「戦争させない」とコールが続いています。私はどこにも所属していませんが、必ず知っている方の顔を見つけます。以前は知らない人ばかりのデモは気が引けましたが同じような人たちが個人で参加されていますので、安心してお出かけください。

言論の自由が、狭められているのを最近実感します。安保法制に反対する学者の会のシンポジウムが突然会場の使用を不許可にされたり、東京の書店での民主主義をテーマにしたキャンペーンに対してネット右翼が抗議し、民主主義を理解するための本が撤去されたりしています。慰安婦問題に関する記事を書いた植村隆さんへの脅迫も止んではいません。

つい先日「表現の自由」に関する国連の特別報告者の来日が、日本政府の都合でキャンセルになったそうです。政権のメディアへの介入は許せません。かつてないほど、言論、表現の自由、報道の自由が危機にさらされています。

先日、朝日新聞の道内版のコラムに山口二郎さん(元北大教授で現法政大教授)は「今や、私たちが

体を張ってでも、多少面倒なことに巻き込まれて消耗しても、自由を守る決意があるかどうか問われている。本当に自由を守るためには、あえて空気を無視することも必要となるのだ。自由を引き継ぐことができなかつたら、私たちは後世の日本人に顔向けできない」と書きました。

SEALDsは「自分のため、次の世代のためこの国の未来のため、主権者として行動しよう」と訴えました。私は彼らの言葉に心を揺さぶられました。

戦争は自由に生きる権利を奪います。何としても安保関連法は廃止にしたいと思います。先日、「戦争させない北海道をつくる市民の会」が発足しました。よびかけ文を紹介します。

安倍政権は国民多くの反対の声を無視し、安保関連法(戦争法)を強行「可決」させました。私たちは、立憲主義、民主主義、国民主権を破壊し、戦争へと突き進んでいる安倍政権をストップさせることなしに、日本の未来はないと考えます。

そのために市民団体「戦争させない北海道をつくる市民の会」を立ち上げました。

来るべき、北海道5区の衆議院補欠選挙、参議院選挙、衆議院選挙をふくめ、あらゆる機会をとらえ、安倍政権の暴走を止めるために、市民が望む統一候補の実現と勝利に力を合わせたいと思います。党利党略にとらわれず、大きく団結して、戦争法の廃止、命を大切に政治、民主主義を取り戻すことをめざします。2015年11月10日呼びかけ人(敬称略)

安積遊歩(ピアカウンセラー)、今川かおる(文学講座委員会代表)、上田文雄(弁護士)、川原茂雄(大学教員)、結城洋一郎(小樽商大名誉教授)、加藤多一(童話作家)、澤 知里(僧侶)、清水和恵(牧師)新西孝司(北星大支援厚別区民の会代表)、萩本和之(大学非常勤講師)

どうぞ賛同人になってください。

連絡先・メール notwar-tsukurukai-1@freeml.com FAX 011-596-5848

電話 090-2070-4423 (担当、小林)

# 「今、いかに本気で『平和』が語れるか ノーマ・フィールドさんの講演を聴いて



11月7日ノーマ・フィールドさんの講演を聴きました。タイトルは「今、いかに本気で『平和』が語れるか」でした。会場の北光教会は240人でいっぱいになりました。

写真は2013, 2, 19 ノーマ・フィールドさんと多喜二・脱原発を語る会（銀河176号から）

ノーマさんの発言要旨をご紹介します。

いまは本当に危機の時期です。日本だけでも、アメリカだけでも、世界だけでもなくて、地球自体が危機に瀕している。みなさん、ご存知かと思うんですけども、今よくいわれるのが、非常に危険な方向にいくか、それとも、なにか光のさす方向にいけるのか。そういう時期だと思います。

浦部頼子さんという方、山口のキリスト教の非常に社会的な運動に関わって来られた方がいます。靖国運動や、ナガイヤスコさんという合祀に反対された方をずっと支えて、ご自身も最高裁までいって負けたにもかかわらず、毎年大きな集会を企画されて3年前残念ながら臍臓がんで亡くなりました。その浦部さんが8月になると平和の大切さが語られることに疑問を持っていました。必ず戦争のむごたらしさや悲しさが語られ、二度と繰り返してはならないことが訴えられる。浦部さんが疑問に思うのは「もしその体験者が本当に戦争が二度と嫌だと思うのであれば、具体的な行為につながるはずではないか。憲法9条の改悪をはかった自民党に票をいれないはずではないか。戦争は二度としてはならないという人たちがすべてそうしていたなら世の中は違っていたはず」と。本当に二度と繰り返してはいけないのであれば、それなりの行動を、私たちはほかの11カ月を通して、なにかしら形にする努力をしなければならぬ。しかしそれは難しいという現実があります。

「逆さまの全体主義」というシェルドン・ウォーリンというアメリカの政治思想史の学者が2003年ごろ、つまりイラク戦争のころから語り出している言葉が、非常に今の私たちの状況にあっているのではないかという気がしたので、ぜひみなさんと考えたいと思いました。

カリスマ的先導的なリーダーのもとに表出されるのではなく、名も顔もない企業国家のもとで選挙、憲法、公民権、報道の自由、司法の独立などなどの建前を尊重するふりをしながらも、実質的には市民を無力の状態に追い込む体制。政治の中身が消えてしまった政党活動。今、アメリカはまさにそうなんですけれども。本当に、来年控えている大統領選挙の、今行われている報道、常時、茶番劇にすぎないわけで、それが世界の運命を左右するアメリカの大

統領選挙となるわけで、本当に情けないというか狂おしいような思いでみております。

「逆さまの全体主義」のもう一つの特徴は、いまの経済状態、新自由主義といわれていますけれども無力感、度重なるリストラや、年金、医療、社会福祉の予算の削減や、大衆教育のさらなる管理強化に強化されて、もちろん組合は過去の話にされてしまっていること。若い人たちは、それが当たり前だと思っているので、なんの保障もないけれども、そのひどさも分からない。

福島原発事故は、最たる不安の状態に人々を追い込んだわけで、選択肢などを見いだす余裕がなくなる。そういうことを、もっと緩やかな形で、いまの新自由主義は、世界にそれを常態化して人々をそれに慣らしている。そして、日本でよく使われる表現、空気をよむことにたけた国民というのがつくりだされているんですよ。

「9条タグ着用 国会、議員会館への入館を認めない」。こういうものをつけているのが許されない。これもまた非常に重要な、象徴的なことではないかと思えます。

小林多喜二を描いた「組曲虐殺」をつくって、まもなく亡くなった井上ひさしさんが多喜二のせりふとして書いた「諦めるには、いい人が多すぎる。でも希望を持つには悪いやつが多すぎる」。今の現実を、ずっと続いている現実をとらえた言葉で、そのなかで彼は「誰か橋渡しするやつがないかどうか」という。諦めるには本当にいい人達が多すぎるし、今生まれていてこれから生まれてくる子どもたちもいる。でも悪いやつも多すぎる。悪いやつが多いからこそ私たちは諦めるべきではないんでしょうね。そういうところにも想像力を馳せて、戦っていきたいと思えます。

「誰もが命を存分に生きたい。平和を存分に語りたい」。そんな世の中にするにはどうしたらいいの？を考えさせられました。

先日野幌駅に向かっていった時、後ろの窓に「戦争させない」と大きく書いた車に出会いました。「すごい勇気！」と思わず声を出していました。平和を創り出すために、私も行動したいと思いません。

11月10日（火）にノーマさんを囲む小さな集いがあり、植村さん応援隊のみなさんが集まり楽しく語りました。講演会などで顔を合わせた人ばかりでしたが、それぞれがノーマさんに縁があり初めて聴く話に引き込まれました。（み）



ホオズキ

## ハンセン病に関するシンポジウムに参加して

11月3日にハンセン病に関するシンポジウムが「かでの2・7」でありました。

オープニングは札幌旭丘高校



の合唱部の皆さんによる素晴らしい合唱でした。

(右写真)

シンポジウムは、5人のパネリストがそれぞれの立場で、ハンセン病を語りました。当事者である桂田博祥さんは、北海道で国鉄職員でした。ハンセン病と診断されて青森の松丘保養園に隔離されました。本人だけでなく家族は差別と偏見に苦しめられました。弟とはいまも音信不通と語りました。らい予防法が廃止されたのは1996年と、つい最近のことです。もう歳をとって、帰る家もないと訴えました。

札幌旭丘高校の放送局の青木麻由さんと滝一葉さんは、ハンセン病に関するラジオドキュメンタリーを制作するために、初めて学び、今の世の中でも似たような事は起こると思うと語り、何事も鵜呑みにしないで、きちんと学んで確認することが大事だと思うと述べました。

ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会の代表の井上昌和さんは、血友病の血液製剤でHIVに感染して「薬害エイズを考える会」を設立。その後ハンセン病と出会い、患者を社会から排除する国の施策にエイズ問題との共通点を知り、国賠訴訟に取り組んだと語りました。私もむすぶ会の立ち上げの時から会員です。

弁護士の秀嶋ゆかりさんは人権擁護委員会でハンセン病問題を初めて学び、回復者と交流を続けるなかで、人権侵害、差別の根深さを知ったと語りました。

コーディネーターは国立ハンセン病資料館の黒尾和久さん。それぞれの発言を簡潔にまとめてくださいました。

沖縄の子どもたちが演じた「光の扉を開けて」がハンセン病やエイズに対する理解を深める素晴らしい内容で感動しました。

桂田さんに会ったのは、私がまだ北海道民医連の



職員だった時に松丘保養園でインタビューし職場新聞に記事を書かせて頂きました。もう10年以上も前でしたが、お元気な姿にホッとしました。

写真・パネリストのみなさん

## ジェノサイドと日本人 加藤直樹さんのトークショー

10月17日、加藤直樹さんのトークショー「ジェノサイドと日本人」というタイトルで紀伊國屋前でありました。



加藤さんは、関東大

震災から90年後の2013年、東京の新大久保の路上で多くの時間を過ごしたことから話をはじめました

在特会のヘイトスピーチのすさまじさは耳を疑うものでした。「殺せ」という叫びは、90年前に東京の路上に響いていた「殺せ」という叫びと共鳴していたと語りました。

関東大震災の虐殺も、日本社会に大きなトラウ



マを残したはず。今、目の前で起きているヘイトスピーチとそのことはつながっているのに、社会はその記憶を葬り去っていると感じました。その当時の殺した側、殺された側の人の姿を伝えたい

とブログで発信を始めました。池袋とか千歳烏山とか、東京に住んでいる人ができるだけ身近に感じられるように地名をいれました。東京以外に住む人からの反響もあり、本として出版したのが「九月、東京の路上で 1923年関東大震災 ジェノサイドの残響」です。(左上写真)

加藤さんは関東大震災から学ぶことを三つあげました。

一つは、差別と偏見。緊急時の流言は偏見から始まること。当時、朝鮮人への差別意識は民衆のあいだに根づいていたこと。差別を許してはならない。

二つ目、治安行政のありかた。マイノリティに配慮できるのかが問われる。加藤さんは東京生まれの都民ですが、石原慎太郎都知事の頃、災害が起きたら、関東大震災の時のような暴動が起こるのではないかと本気で心配していたそうです。

三つ目は軍事。ベトナム戦争やイラク戦争でも同様のことが起こったことを忘れてはならないと語りました。

いとうせいこうさんが本に寄せた帯文には「過ちを繰り返さないためにこそ、歴史があるのではないか。繰り返してはならない、この歴史を」に深く同意しました。

「東京の路上に90年前の面影を見出すのは難しい。だが実は、あの虐殺の『残響』は、街にも、人の心の中にも響いている。90年前の路上を訪ねることは、今に続く残響を聞きとることでもある」(加藤直樹さん本文から)

## 「首相官邸の前で」上映会とトークに参加して

3.11後に反原発の運動は各地に広がりましたが、官邸前のデモは、マスコミでもほとんど報じられることがありませんでした。



2012年の夏20万の人々が官邸前を埋めました。その当時のデモの様子と参加者のインタビューで構成した「首相官邸の前で」の上映会が11月22日にシアターキノが主催して札幌プラザでありました。

歴史社会学者で慶応大教授の小熊英二さんが監督・出資し、石崎俊一さんが撮影・編集を担当しました。今回のドキュメンタリーが今までと違うのは、参加者たちがYouTubeなどで公開した映像を多数使用していることです。その全ての許可をもらって編集しています。

事故前はまったく別々の立場にいた8人のインタビューが印象的でした。病院事務職員、福島原発から1.5kmに住んでいた女性、日本に長年住むオランダ人デモに初めて参加した若い女性、菅直人・元首相もインタビューを受けています。事故後に何を感じ、どのようにデモに駆り立てられたのかを語ります。共通していたのは「脱原発」と「民主主義の危機」でした。

福島原発の近くに住んでいた女性は避難する時、正しい情報を知らされていませんでした。東電や政府に怒りの声をあげたのです。人前で話すのは苦手だった若い女性が震える声でマイクを握る姿もありました。その女性は「微力は無力ではない」とインタビューに答えました。名言ですね。デモに参加したことのない普通の人の怒りが胸に迫って、涙を禁じえなかったです。

この20万人のコールを福島の人たちに聞いてほしいと思いました。こんなに原発に反対する人々がいることに、きっと励まされるのではないのでしょうか？

自分たちが民主主義を再生しようと声を上げはじめたのをこの映画で実感できました。

上映後、吉田徹さん（北大教授）の質問に答える形でトークがありました。小熊さんは震災後、頻繁にデモに参加し世の中が変わってきていることに気づき、この現象をマスコミがほとんど報じないことに疑問を持ったと語りました。「この出来事を記録したいと思った。自分は歴史家であり、社会学者だ。いま自分がやるべきことは何かといえば、これを記録し、後世に残すことだ」と映画にすることを決意。海外の人たちにも観てもらいたいと字幕に英訳も付けました。

「性別も世代も、地位も国籍も、出身地も志向もばらばらだ。そうした人びとが、一つの場につどう姿は稀有のことであると同時に、力強く美しいと思った」小熊さん。私も日常的にデモに参加していたけれどそれぞれの人が「この世の中をなんとかしなきゃ」という思いが伝わってきました。この映画を観て泣けたのは、参加していた人々、みんなの怒りを共有できた共感だったのですね。

黙っていたら社会は変わらない。この映画を観て、歴史をつくる運動に参加している喜びを感じました。

## 「阿賀に生きる」が伝えたいこと



11月15日、さっぽろ自由学校「遊」が主催した「阿賀に生きる」を教育文化会館で観ました。

この映画は1989年から1992年の3

年間、佐藤真監督と7人のスタッフが新潟水俣病の被害を受けた阿賀野川流域の人々の暮らしに寄り添って撮影されました。

鹿瀬町で暮らしながら夫婦で田んぼを作っている長谷川芳男さんや妻のミヤエさん。川舟大工の遠藤武さんや彼を支える妻のミキさん。餅つき職人の加藤作二さんやキソさん夫婦の自然と共に生きる姿が綴られます。今こんな生活があるのだろうか？と懐かしさと、大地に根をおろして逞しく生きる姿に共感しました。

新潟弁の柔らかさ。標準語にしてみると、この生活感やユーモアは生まれません。水俣病を鋭く告発した映画ではありませんが、生きる喜びにあふれた心豊かな暮らしが写し出されて、こんな生活、北海道にもあったなあと懐かしく、祖父母の暮らしを思い出しました。

工場排水を垂れ流し新潟水俣病が発生しました。公害は原発による放射能汚染とつながっています。

撮影された小林茂さんは「戦後追い求めてきた豊かさを考え直す結節点にある今、あらためて多くの人に見てもらいたい」と語りました。

## 笑顔をお忘れません

9月に相次いで二人の友人を亡くしました。50歳と66歳。早すぎます。お一人はハンセン病回復者と北海道をむすぶ会でゆるやかな活動を一緒に続けていた久能由弥さん。4年前に脳腫瘍が見つかりながら、手術や抗がん剤の治療を行わず、大学教員も続けてこられました。

体調のいい時には家族で旅行や音楽会、札幌ドームでの野球観戦を楽しんだそうです。弘道さん（夫）が涙ぐみながら、結婚当時よりもずっといい夫婦になれたと語ったのが心に残りました。

小野妙子さんは、銀河通信の読者であり、音楽会などで何度か一緒しました。品よく、人への心遣いが自然で素敵な方でした。妙子さんの病气発見は3月でした。手術は部分的に行い、その後は自宅でご家族と過ごされたそうです。当時の写真を拝見しましたが、いつもと変わらない優しい笑顔たたえていたのが印象的でした。困難な時にも笑顔でいられる姿に私もそうありたいと思いました。

妙子さんの95歳のお父さまが、娘を思いやる手紙を送って下さったと聞き

涙があふれました。お二人から、生活を楽しみ、精一杯生きることの尊さを学びました。お二人に出会えて良かったです。どうぞ天国でご家族と私たちを見守ってください。



# BOOKS

## チェルノブイリの祈り 未来の物語

スベトラーナ・アレクシエービッチ著 岩波書店 1040円



## 生きて帰ってきた男 —ある日本兵の戦争と戦後—

小熊英二著 岩波新書 940円



著者の父、小熊謙二さんは1925年生まれ。19歳で徴兵されて旧満州に行き、過酷なシベリア抑留生活を経て日本に帰国したものの、職と住まいを求めて転々となりました。過労から結核を患いますが、その後、高度経済成長の波に乗ってスポーツ用品店を営み、中国籍の元日本兵の戦後補償裁判にも関わります。

謙二さんが戦時中の苦労や当時の街の様子などを驚くほどの記憶力で淡々と語り、その聞き書きをまとめたのが本書です。

抑留中に死んだ戦友の最期を遺族に伝えることで「自己の戦争の記憶にふん切りをつけた」と感じますが国籍によって、戦後補償されないのはおかしいと、共同で原告にもなります。面倒なことには関わりたくない人が多い中で反骨精神に感銘を受けました。

著者はさまざまな質問の最後に、人生の苦しい局面でもっとも大事なことは何だったかを聞きます。謙二さんは「希望だ。それがあれば、人間は生きていける」と答えます。その思いは著者にも受け継がれているようです。

現在も一人暮らしを続けている謙二さんは、「アムネスティ」や「もやい」「ペシャワール会」「国境なき医師団」などの非営利団体に会費や寄付を払い、「良心の囚人」の収監に抗議する英文の葉書を送っています。

本書はオーラルヒストリーであると同時に、戦後史の証言としても貴重です。普通の人々の歴史が生き生きと伝わってきました。

私の父は1922年生まれです。4年前88歳で亡くなりましたが、父の人生と重なりました。父も謙二さんと同様に旧制中学を卒業して、通信兵として徴兵されました。南方でしたが食べるものがなく戦地で病気に倒れ日本に送還されたそうです。シベリア抑留されなかったのは幸運でした。早くに両親を亡くしていた父は病氣療養後、郷里の福島県矢祭町から、誰も知り合いのいない北海道に渡りました。就職の時は、長い行列を作ったそうです。当時、公務員試験があったのかは知りませんが国家公務員になり、道庁での研修を受けて、日高の営林署勤務になりました。北海道に来ることがなかったら私は存在していませんでした。この本を読みながら父の若い頃の苦労を聞いておけば良かったと思いました。

小熊英二さんは、「普通の人々の持っているすごさを距離をおいて立体的に書いた」と高く評価されて小林秀雄賞を受賞しました。

謙二さんは北海道常呂町生まれ。親近感を覚ええました。

1986年の巨大原発事故に遭遇した人々の悲しみと衝撃とは何か。本書は普通の人々が黙してきたことを、被災地での丹念な取材で聞き取ったドキュメントです。

アレクシエービッチはあくまでも被災者に寄り添い、ひたすら人々の気持ちを再現しようと努めました。被曝によって夫と、胎内にいた赤ちゃんを失った若妻の愛と悲しみ。「ここには放射能なんかあるもんかね。チョウチョがとんでるし」と強制疎開地域の自宅に戻ってきた村民の声も聞き取ります。

人々の息づかいが聞こえてくるような詩のような美しい文章です。

「私、ついこの間までとっても幸せでした」で始まる、若い妻の証言に涙を禁じ得ません。夫は原発事故の半年後に現場に行き、被曝し発病し死に至りました。被曝の危険性を政府は全く知らせなかったのです。多くの人々が被曝し、口を閉ざしました。

著者は国中を駆け回り、数百人の人たちに会いに行きました。そして、彼らの心を開き、その言葉を丁寧に書きとめたのです。多くの声が合わさって、一つの大きな時代の記録になりました。それが「国家の論理」をふりかざす権力に対するしなやかな抵抗でした。

著者は自分自身にもインタビューします。「チェルノブイリ後、私たちが住んでいるのは別の世界です。前の世界はなくなりました。でも人はこのことを考えたがらない」「人々は忘れてがっています、もう過去のことだと自分を納得させて」そして「私は未来のことを書き記している」と結んでいます。まるで福島を予言しているかのような文章に衝撃を受けました。

チェルノブイリ事故が起きた時、その事故の大きさと深刻さが世界中に衝撃を与えました。

息子がこの事故の4日後に生まれたので、当時ずいぶん食べ物に気がついたことを思い出します。札幌で勉強会に参加したり、高木仁三郎さんの反原発出前講座を受講したりしたのもこの頃でした。地域で署名活動をして泊原発建設に反対するのに止めることはできませんでした。そのうち「日本の原発は大丈夫」と根拠のない安全神話に取り込まれてしまいました。そして起きた福島事故に「やっぱり原発は恐ろしい」と思い知らされました。そこで暮らしている人々にもたらした被害の大きさに声を失いました。

歴史に埋もれるはずだった市井の人々の声がアレクシエービッチによって丁寧にすくいあげられノーベル文学賞につながったことに感銘を受けました。福島からこういう真実の声を集めた本が出ることを期待します。



東北と北海道を舞台に、馬とかかわる数奇な運命を持つ家族の、明治から平成まで6世代の歩みが描かれます。

北海道へ馬と一緒に二で移っていく捨造が道中で嗚咽を漏らす姿から物語が始まります。雪崩に遭い、雪洞に閉じ込め

た女性が、馬と自身の生死をかけて、馬の肉を食べるシーンが壮絶でした。その女性こそ捨蔵の母でした。

命がけで生まれた捨蔵のこれからの人生を予感させます。捨蔵一家と馬の一族が一緒になって、一步步未来を切り拓いていきます。根室の沖に浮かぶ花島で放牧させていた馬を失います。捨蔵の孫は島に置き去りにした馬を、年月が経っても気かけ続けます。そして、その思いはその孫へと引き継がれるのです。

花島に残された馬は野生化しながら、命をつないでいました。馬と人の辿ってきた道が時を超えて重なり感動します。作者は別海町で羊飼いをしながら執筆したというだけあって、自然描写が生き生きとして壮観です。

私の母方の祖父は、淡路島から北海道の日高に入植。農業をしていましたが、馬もたくさん飼っていました。本書で描かれる馬と同じ農耕馬でした。私は夏休みは日高で過ごすことが多かったのですが、ある日、放牧していた馬が一頭、帰ってこなかったことがありました。夜遅くまで探してようやく見つけた時の祖父の安堵の表情が忘れられません。馬は家族の一員だったのです。祖父の思い出と共に人を見つめる馬の賢い目を懐かしく思い出しました。

北の大地でたくましく生きる一族と馬が風景の中に溶け込んでいて、久しぶりに土の匂いを感じました。

## 原発をとめるアジアの人びと ノーニュークス・アジア

ノーニュークス・アジアフォーラム編著  
創史社 1500円

福島原発事故が収束しない中で、再稼働や原発輸出が進められようとしています。

本書にはノーニュークス・アジアフォーラムの海を超えた22年間の活動がまとめられています。日本が原発を輸出しようとしている、インド、トルコ、ベトナム、インドネシア、台湾、フィリピン、タイ韓国で何が起きているのか？それらの国で人々が立ち上がり、原発を止めるために闘っていることが記され勇気づけられます。

私は2013年に台湾の元ハンセン病患者が暮らす療養所を仲間と訪ねましたが、そこには人権問題に取り組むたくさんの学生が、元患者さんらと親しく交流する姿がありました。集会室には「ノーモアフクシマ」と書いたポスターがあり、台湾での反原発運動のお話も聞くことができました。2013年3月



に行われた第4原発建設反対のデモに、台北など4か所で20万近くの人々が参加したのです。その映像を見せてもらいました。若いお母さんや学生に混じって、元ハンセン病の患者さんの姿もあり感動しました。

アジアの反原発運動の歴史と現状を知ることが新たな未来を展望することにつながります。私たちの再稼働反対の闘いはアジアの人々の闘いにつながっているのです。私もこの本を読んで視野が広がりました。読むべき本が多いですが、アジアの原発にも関心を持っていただけたらと思います



SEALDs (自由と民主主義のための学生緊急行動)  
編著 大月書店 1500円



高橋源一郎×SEALDs  
民主主義ってなんだ？

河出書房新社 1200円

SEALDs  
民主主義ってこれだ！

『民主主義ってなんだ？』はSEALDsメンバーの奥田愛基君、牛田悦正君、芝田万奈さんの3人と、作家の高橋源一郎さんの対談を書き起こしたものです。

第1部は、「SEALDsってなんだ？」と題し、メンバー3人の自己紹介から始まります。それぞれ、ホームレス支援をする父親がウザくて中学から家を出たり、父親がギャンブラーで、母親と離婚し、その後亡くなってしまっていたり、海外の帰国子女だったり、一風変わった背景を持っています。

3人は、2012年の夏頃から、官邸前での反原発抗議に顔を出すようになります。奥田君の提案で、広く学生に対して呼びかけをします。それで初めに集まったのは、20人ほど。そのうち100人くらいの学生が、毎週集まるようになります。あくまでもデモは見学で、むしろそのあと日比谷公園に集まり、「デモを見てどう思った？」「原発についてどう思う？」などのことを、学生同士で話し合うのがメインでした。なので、SEALDsが結成されるまでに、遡ること3年にわたって、活動の積み上げがあったことが語られます。SEALDsは、今年の6月から、毎週金曜日に国会前でデモを始め、そこで多くの人を集めて、一躍脚光を浴びるようになるのですが、デモでのコールの決め方や、活動資金をどうしているか、物事をどのように決定しているかなどについても、SEALDsの3人が詳しく話しています。素晴らしいコールは議論して決めていることが分かり感心しました。

第2部は、「民主主義ってなんだ？」と題し、メンバーのそれぞれが、民主主義についてどう考えるかが語られています。

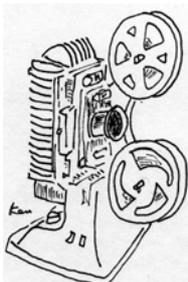
『民主主義ってこれだ！』は若者たちはどんな思いで運動に参加し、日本をどのように変えたいのか。いまもっとも注目される市民運動の最前線にいる若者たちの素顔に迫るドキュメント。

デモでの学生たちのSpeech、それぞれが自身の考えを述べるMonologue、SEALDsメンバー3人によるDialogue、高畑勲や茂木健一郎、後藤正文、小林節といった各界の著名人からの応援のMessage等が、路上の臨場感溢れる写真と共に適切なバランスで散りばめられ、この1冊でSEALDsが何を語っているのか(Our voice)、何者なのか(What's SEALDs?)、どこから来たのか(Where we are from)、どんな活動をしているのか(SEALDs act)について理解できる構成になっています。これらの全てをSEALDsメンバーが編集しているのが素晴らしい。さらに参議院特別委員会公聴会におけるSEALDsメンバー奥田愛基君の意見陳述全文や彼と高橋源一郎さんの安保法制成立後に行われた対談(Our Democracy)も収録されています。

若者には視覚に訴えた構成が評判がいいようですが、私には字が小さく読むのが辛かったです。特に写真に載せた字は正直読みにくく拡大鏡が必要でした。しかし一番主張したいことが大きな文字で表現しているので、この部分だけ読んでもこの世の中をどうしたいのかが分かり感動します。「僕はこの国がもっと良くなってほしい。沖縄や福島のように、弱いものいじめをされて、ふるさとや仲間や言葉が奪われるようなことが起きてほしくない」。この言葉に共感します。

### ふたつの名前を持つ少年

ドイツ・フランス合作  
ベベ・ダンカート監督



自身もユダヤ人収容所に入れられた経験を持つ児童文学者

ウーリー・オルレブが逃げ延びた人の講演を聞き、書いた「走れ、走って逃げろ」を映画化。

ポーランドのゲットーから逃げ出した8歳のスリックは、父親と別れる前にこう言い聞かされる。「名前を捨てて、絶対に生き抜け。父さん母さんは忘れてもいい。だが、正体を偽ってもユダヤ人であることは忘れるな」。

ユレクとして生き抜いたのは、実に3年間という年月。寒さが厳しいポーランドの冬に必死で立ち向かう小さなユレクの姿に、胸が痛くなる。親切な婦人、パルチザンの青年、ナチスの将校、農場の少女らとの出会いが絶体絶命の危機にある彼を救います。この幸運は彼自身が引き寄せたものだろう。絶対に生き抜くという強い意志と利発さ、そして勇気が人々の心を動かしたのです。そうして彼はキリスト教徒を装い、「ユダヤ人じゃない!」と叫びながら生きる。ユダヤ人であるがゆえに腕を失いながらも。

ドイツは徹底してナチズムの「忌まわしい過去」と向き合い続ける姿勢をとります。日本では過去の戦争に関して「将来に渡って謝罪し続けること」を避けようという空気があります。

わずか8歳の少年が、戦争という極限状況のなか機転を利かせながら、たくましく、したたかに生きのび

た、というのは、神様がユレク少年に「歴史の語り部」という役割を背負わせたのかもしれない。

あの厳しい時代にユダヤ人と知りつつ助けようとした人々がいたことに救われました。

### セバスチャン・サルガド 地球へのラブレター

ビム・ベンダース監督  
ジュリアーノ・リベイロ・サルガド監督



仏・ブラジル・伊合作

ブラジル出身の写真家セバスチャン・サルガドを捉えたドキュメンタリー。

モノクロを基調とし、人間の死や破壊、腐敗といった根源的なテーマと、その荘厳な作風から“神の眼”を持つ写真家とも言われるサルガド。地球上の最も美しい場所を探し求め、ガラパゴスやアラスカ、サハラ砂漠などで撮影を行い、圧巻の風景を写し出したサルガドのプロジェクト「Genesis (ジェネシス)」に、ベンダースとサルガドの息子ジュリアーノ・リベイロ・サルガドが同行。2人の視点から、写真家サルガドの足跡を解き明かしていきます。

先住民を撮影するときは、一緒に生活し彼らと溶け込んでから撮影。そこには人間としての尊厳が映し出されていました。人々の苦しみを描いているだけではない。そこにはどんなに墜ちても決して失われない人間の最後の誇りというようなものが、くっきりと屹立しているのです。こんなすごい写真を私は見たことがありません。ルワンダの虐殺の取材を終えたサルガドは苦しみと絶望の果てに、まったく新たな世界へと踏み込んでいきます。いまも地球に残る未開の土地を取材し、そこに生きるさまざまな生命、大地を撮影するプロジェクトをはじめます。このジェネシス、創世と題された作品は息を飲むほど美しい。

最後に彼は、故郷ブラジルの農場と森へと回帰して、森の再生に取り組みます。10年後の奇跡の風景が圧巻!素晴らしい写真をずっと見ていたいと映画が終わっても去りがたかったです。

### ボーイ・ソプラノ ただひとつの歌声

アメリカ・フランソワ・ジラル監督



ボーイ・ソプラノの透き通るような歌声がだせるのは、一生のほんの少し間でしかなくて、それ故に天使の歌声と言われます。

複雑な家庭環境に育った少年が、名門少年合唱団での合唱団団長との出会いにより、自身の人生を切り開いていく物語です。

たぐいまれな美声の持ち主で、歌うことだけは上手なステットは、楽譜が読めずに仲間からいじめにあいながらも、カーヴェルの厳しい指導の下、次第に歌うことに喜びを感じるようになります。テッドがひたむきに努力する姿は、合唱団の仲間や大人も変えていきます。

合唱がとにかく素晴らしいです。天使の歌声に心が洗われました。

## ベル & セバスチャン



フランス・ニコラ・ヴァニエ監督

1943年、フレンチアルプスの麓の小さな村で、孤児のセバスチャンは、血のつながらないおじいちゃんと、その姪と3人で暮ら

しています。「ママはアメリカにいて、いつか迎えに来る」と聞かされてきたセバスチャン。

冒頭、崖っぷちに取り残されたヤギを助けに、セバスチャンをロープ一本で向かわせてしまうおじいちゃん。このシーン、びっくりしました。おじいちゃんが、しっかりロープで確保してセバスチャンが空中を飛びます。下を見ると断崖絶壁。足が岩場についていないです。アルプスの素晴らしい絶景が広がり圧巻です。セバスチャンは、ある日、山の中で大きな犬と出会います。飼い主に虐待され山に逃げ、村人たちからは羊や人を襲う野獣だと誤解されていた犬でした。孤独なセバスチャンは、大きな犬と友だちになり、ベルと名付けて二人で心を通わせます。大勢の人たちで、ベルを探し、殺そうとしますが、セバスチャンはベルを懸命に守りぬくのです。ベルが、けが人を助けたことで、村人の誤解がとけます。

その頃、村には戦争が影を落とし始めていました。フランスはナチス占領下であったのです。後半はユダヤ人家族を救うため、姪と、少年、愛犬が、厳しい冬のアルプス越えを命がけで挑みます。道案内をしたのがベルです。ナチス兵が迫ってくる。雪崩が危ない。息詰まるシーンに、私の心拍数が上がりました。山仲間を雪崩で失ったことが、昨日のこのように思えました。落ちたら命はないスノーブリッジを渡るシーンが今も目に浮かびます。

この映画を作ったヴァニエの自然をとらえる映像が素晴らしい。緑の山、青い湖、羊の群れやカモシカ、群舞する鳥、冬山の厳かな美しさ。ヴァニエは探検家でもあり、自然保護の活動もしている人だと知りました。舞台になったアルプスの地形は熟知したうえでの撮影でした。

2400人のオーディションで選ばれた少年役のフェリックス・ボシュエの愛らしさに加えて、山で生きるたくましさや勇気のあるセバスチャンを素直な感性で見事に演じています。私もフェリックスのファンになりました。是非、続編が待ちどおしい。

## ベトナムの風に吹かれて

大森一樹監督



ベトナムで日本語教師として働く小松みゆきさんが認知症の母との暮らしをつづった「越後のBaちゃんベトナムへ行く」が原作で、松坂慶子主演。

認知症の母をベトナムに住む娘が引き取り、そこで繰り広げられる泣き笑いの物語です。90歳の母に思いを重ねてみました。ベトナムではお年寄りが大事にされるのもとても気持ちが良かったです。松坂慶子がおっとりして、口調もゆったりしているのがベトナムの空気に馴染んでいました。

怪我をした母の介護など大変な場面もありましたが、原作者は認知症を「魔法にかかった人」と割り切ってイライラを解消したそうです。辛い時はさりげなく助けてくれた旧友も素敵でした。

介護は家族が抱え込むと大変です。地域で助けてくれる環境があるとずいぶん気持ちも楽になりますね。

## 「国際市場で逢いましょう」 上映会のお知らせ



韓国民衆の一大叙事詩、韓国歴代2位の観客！

「TSUNAMI ツナミ」のコン・ジェギョン監督が、国際市場を主舞台に、激動の時代を家族のために生きたひとりの男の生涯をつむいだ大河ドラマ。

朝鮮戦争で父と妹と離れ離れになり、母と残された兄妹とともに避難民として釜山で育ったドクス。父親代わりとして一家を支えるため西ドイツへ出稼ぎにいき、ベトナム戦争に技術者として遠征し、生死の瀬戸際に立たされるなど過酷な人生を歩むが、それでも家族への愛情と笑顔を絶やさず、時代の荒波を生き抜いていく。

東方神起のコンホさんが出ています。ベトナムに参戦した、実在する有名歌手「ナム・ジン」として出演しています。（2014年制作・127分）

2016年2月13日（土）会場：札幌プラザ2・5（狸小路5丁目）

【上映】 ①11:00 ②14:30 ③18:30

【前売り】1,000円（学生500円）

【当日】1,300円 シニア1,000円（学生800円）

★ 前売り券は市内各プレイガイド（大丸藤井・道新・教文・チケットピア）で発売中！

【主催・問い合わせ】札幌映画サークル

TEL/FAX：011-747-7314

Eメール：sapporocinema@yahoo.co.jp

<http://www.sapporocinema.net>

読者でチケット希望の方は090-6870-9225（樋口）又はminginga@agate.plala.or.jp にご連絡ください。

## 購読料とカンパをありがとうございます （敬称略） 2015.9.30～11.20

土本武司（札幌市）大久保勉（八戸市）但馬桂子（江別市）東由香子（札幌市）菅沼宏之（札幌市）熊坂政晃（八王子市）大久保フヨ（北広島市）助田梨枝子（芽室町）新西孝司（札幌市）宮森多恵子（札幌市）三上妙子（札幌市）梅沢俊・節子（札幌市）カレンダーも 合計20,000円（カンパも含む）は印刷と送料に使わせていただきます。手数料のかからないゆうちょ銀行は19000-3310 9571 です。来年もご支援をお願いします

今年最後の通信を発行できホッとしています。年賀状は出しませんが、みなさまからの年賀状は楽しみにしています。2016年は戦争法が廃止になるよう頑張りたいと思います。年明けの通信は1月20日前後を予定しています。（み）